

グラノヴェター

『転職——ネットワークとキャリアの研究』

【労働社会学・産業社会学・教育社会学】

渡辺 深

本稿で紹介する著書の原題は、*Getting a Job: A Study of Contacts and Careers* (第2版)、シカゴ大学出版局、出版は1995年である。本書の初版は、著者が米国の男子ホワイト・カラー労働者の転職過程に関する博士論文に加筆改訂し、ハーバード大学出版局より1974年に初めて公刊された。大変話題となった初版は、労働移動に関する多くの論文で頻繁に引用される重要な著書となった。特に、グラノヴェターの「弱い紐帯の仮説 (Granovetter 1973)」は、労働移動の様々な研究者によって経験的に追試されるとともに、ネットワークの観点からも多くの理論的研究を生み出すものとなった。本書の「後書き1994：再検討と新しい課題」では、初版の出版以来およそ20年間の労働移動に関する研究成果を吟味し、総括的な結論が提供された。さらに、本書には、「新しい経済社会学」を樹立する契機となった重要な理論的論文、*American Journal of Sociology* に掲載の「経済行為と社会構造——埋め込みの問題」(Granovetter 1985) が付記Dとして収録された。グラノヴェターは、この論文により米国社会学会理論部会賞受賞の栄に浴した。この論文も経済社会学の様々な分野で頻繁に引用され、彼が提唱する「埋め込み」アプローチが広く活用されるようになった。

第2版への序で著者が述べているように、上記の1985年の論文を読むと、1974年の初版にまとめられた労働市場行動の研究成果がいかにか「新しい経済社会学」の基礎を提供するものなのかがよく理解できる。つまり、初版の労働市場行動の研究が、様々な概念と命題の形成を通じて、帰納的に「埋め込み」アプローチ(概念枠組)を発達させ、今度は、1985年の論文が、演繹的にそのアプローチを労働市場だけでなく様々な市場(製品市場、金融市場など)や経済現象一般に適用可能

であることを論じたのである。

著者のマーク・グラノヴェターは、1943年生まれ、現在スタンフォード大学社会学教授である。彼は、1970年にハーバード大学で社会学の研究によって博士号(Ph.D.)を得て、長らくニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校の社会学教授の職にあったが、ノース・ウェスタン大学社会学部を経て、1995年からスタンフォード大学で教えている。言うまでもなく、グラノヴェターは、「新しい経済社会学」における指導的な社会学者の一人であり、本書の他に、彼が着実な研究活動から生み出す多数の創意に満ちた論文は、常に注目を集めてきた。

1 ジョブ・マッチング過程に関する先駆的研究

本書のグラノヴェターの調査は、1970年に米国ボストン郊外のニュートン市に在住の282人の男子ホワイトカラー(専門職、技術職、管理職)労働者を対象に面接法と郵送法によって行われた。調査目的は、実際に労働者が就業情報にどのように接近し、どのように労働者と職業のマッチングが生み出されるのか、その因果関係の連鎖を追跡し、そのメカニズムを解明することである。労働市場におけるジョブ・マッチング過程——異なる属性を持つ労働者を異なる収入や地位をもたらす職業に結びつける過程——は、重要な研究領域であり、この過程に関する理論的論議は彼の他の論文で展開された(Granovetter 1981, 1982; Granovetter and Tilly 1988)。

労働者は、自分のソーシャル・ネットワーク(人的つながり)を通じて就業情報を入手する機会が多いので、情報は社会関係に埋め込まれていると考えられる。さらに、ネットワークを用いると望ましい仕事が見つかる機会が多い。また、情報の多くは、経済学の職探し理論が想定するような職

探しによって得られるのではなく、職探しとは無関係な他の社会的相互作用を通じて、たまたま、その副産物として伝播される傾向がある。このように、労働者がどんなネットワークを持っているのか、すなわち、社会構造における労働者の位置が移動パターンに影響を与えるのである。要するに、労働者と職業を結びつける就業情報は労働市場に広く行き渡っているのではなく、「就業情報は他の社会構造過程に深く埋め込まれている(Granovetter 1981:23)」からであると論じられる。

2 弱い紐帯の仮説

それでは、どのようなコンタクト（就業情報の提供者）が情報への接近において有利な位置にいるのだろうか。グラノヴェッターは、転職する際に、労働者は強い紐帯を持つ（いつも会う）人よりも、弱い紐帯を持つ（まれにしか会わない）人から役に立つ就業情報を得るという傾向を見つけた。この発見にもとづいて、グラノヴェッターは「弱い紐帯の仮説(Granovetter 1973)」を提唱する。すなわち、いつも会っている人々には、既に知られている同じ情報を共有するという社会構造的な傾向があるので、労働者は、かえって、たまに会う人から多くの新しい情報を入手する可能性があるという仮説である。これは、強い紐帯で結ばれる人々は同じ社会圏に属し、類似した情報を持ち、逆に、弱い紐帯で結ばれる人々は異なる社会圏に属し、異なる情報を持つ傾向があるという推論にもとづく。すなわち、図が示すように、弱い紐帯は、(集

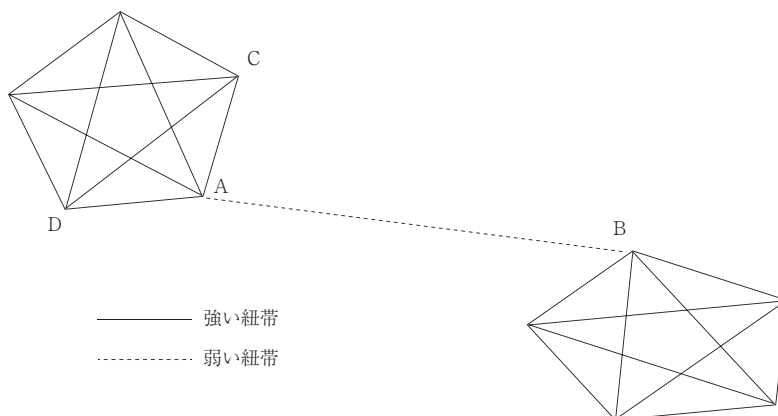
団の成員相互が皆知合いであるような)密度の高い集団の間を「橋渡し」する傾向があると想定する。弱い紐帯の仮説に関する理論的根拠は、「弱い紐帯の強さ」に関する彼の論文(Granovetter 1973, 1982)で詳細に議論され、数多くの論文に引用された。

グラノヴェッターの研究は、労働者が仕事を見つける過程(マッチング過程の供給サイド)の研究であるが、その後、雇用主が労働者を見つける過程(マッチング過程の需要サイド)の研究も数多く行われるようになった。多くの労働者が人的つながりによって就業情報を得ることは、同様に、多くの雇用主も人的つながりを用いて労働者に関する情報に接近することを意味し、実際に、多くの雇用主が労働者をネットワークを通じて採用する。さらに、ネットワークを通じての応募は、労働者にとっても、雇用主にとっても有利な採用方法であるという調査結果もある(Fernandez and Weinberg 1997; Fernandez, Castilla and Moore 2000)。

3 「埋め込み概念」と新しい経済社会学

さらに、グラノヴェッターは、1985年の論文「経済行為と社会構造——埋め込みの問題(Granovetter 1985)」を発表し、その年の米国社会学会で「新しい経済社会学」と命名し、それが実質的な「新しい経済社会学」樹立の宣言となった。この論文は本書の付記Dとして掲載された。彼は、ポランニーの埋め込み概念を「新しい経済社会学」の中心概念として復活させ、経済行為が社会構造に

図 弱い紐帯の仮説



埋め込まれていると論じる。その後、米国の多くの社会学者によって経済社会学の研究が蓄積され、経済社会学の研究がさらに進んでいる。グラノヴェッターの提唱するアプローチの中心的概念である「埋め込み (embeddedness)」概念は、「人間の経済は……経済的な制度と非経済的な制度に埋め込まれ、編み込まれているのである」と議論するカール・ポランニー (ポランニー 1975:268) によって用いられたものである。しかし、グラノヴェッターは、1985年の論文において、その概念が先市場社会だけでなく、市場社会の経済の分析にも適用可能であり、全ての市場過程は社会学の分析対象であるので、市場過程の中核的な特性が社会学的分析によって明らかになると主張する。要するに、彼は「経済活動が社会的メカニズムを媒介して起こる」と論じる。

このように、新しい経済社会学とは、グラノヴェッター (Granovetter 1990) が「新しい経済社会学」と称し、「埋め込み」概念にもとづき、1980年代に社会学の専門領域として復活した経済社会学である。これは、経済と社会は有機的に相互に結びついており、経済現象の説明にはその「社会構造」の理解が不可欠であると主張する視点である。ここでいう「社会構造」とは、主に、認知、文化、社会関係 (ネットワーク)、権力を意味するが、もちろん、歴史や制度などマクロな社会構造も含むものである。

4 日本のジョブ・マッチング過程

筆者が本書に初めて出会ったのは、筆者がカリフォルニア大学ロスアンゼルス校 (UCLA) の大学院生の時であった。雇用関係の日米比較について博士論文を書こうとしていた時、論文指導にあたってくれたオスカー・グラスキー教授から本書の研究を日本でやってみたらどうかと勧められた。筆者は、本書を読んで、たちまちその独創的な理論と精緻な方法論の魅力に惹かれ、本書にもとづいて日米の労働者の転職過程を比較研究し、1987年に博士論文としてまとめた (Watanabe 1987)。調査過程あるいは論文執筆を通じ、グラノヴェッター教授には様々なご指導をいただいた。また、1994年にはノース・ウェスタン大学にお

ける在外研究でグラノヴェッター教授のもとで直接ご指導いただく機会に恵まれ、本書が労働市場のジョブ・マッチング過程研究、および、経済社会学に対する大変貴重な貢献であることを改めて痛感し、専門家のみでなく、広く一般の読者にもジョブ・マッチング過程のメカニズムを知ってもらいたいと思い、本書の翻訳を希望するに至った。この訳業では原著者グラノヴェッター教授へ疑問点をたびたび直接照会したが、その一つひとつに対して丁寧の説明して下さった。この訳業を通じ筆者自身たびたび新たな発見があり、とても楽しい経験であった。

筆者は、東京の男性労働者を対象に調査を行い、弱い紐帯の仮説を検証した。筆者は、1985年から2002年までの17年間に、日本の労働市場におけるジョブ・マッチング過程がどのように変化したのかについて分析した (渡辺 2014)。調査結果から、良い仕事をもたらす紐帯の変化として、「強い紐帯」から「弱い紐帯」への変化が観察された。1985年東京調査では、強い紐帯を活用すると、情報収集度が高く、現職の年収、会社帰属意識、職務満足度が高いという分析結果が得られた。しかし、2002年東京調査では、就職で弱い紐帯を用いると現職の職位が高く、転職で弱い紐帯を活用すると転職後の年収が増加し、規模の大きい企業に転職する傾向が見られた。このように、東京男性労働者全体において「弱い紐帯の強さ」が確認された。一方、1985年東京調査で観察された「強い紐帯を活用すると望ましい転職結果が得られる」という傾向は、2002年東京調査では全く見られなかった。要するに、1985年から2002年の17年間に、男性労働者において、紐帯の強さが転職結果に与える効果が「強い紐帯」から「弱い紐帯」に変化したと考えられるだろう。

それでは、紐帯の強さが転職結果に及ぼす効果が「強い紐帯」から「弱い紐帯」に変化したのはなぜだろうか。ここでは、「ハイアラキー構造における自己の位置によって、資源に接近するための紐帯の強さが異なる」というリンの議論 (Lin 2001) が有効に活用できるだろう。それは、「弱い紐帯は、その紐帯を通じて自分よりもハイアラキー構造の高い位置にいる他の人々に接近する場

合に限り、より良い仕事を生み出すことが期待されるが、最初からハイアラキー構造の高い位置にいる人々の場合には、むしろ強い紐帯の使用が利益をもたらす」という議論である。

上記の17年間に日本の労働市場では、失業率と非正規雇用の割合が増加した。このような日本の労働市場の変化は、労働者の転職行動にどのような影響を与えたのだろうか。リンの議論を用いて考察すると、失業率の増加および非正規雇用の労働者の増加が、社会経済的地位の低い集団のメンバー（ハイアラキー構造の低い位置にいる人々）の増加という構造的変化を意味するならば、全体として、強い紐帯から構成される身近な「内輪」の者同士で情報を共有する従来の「閉鎖型」ネットワークでは、転職に役立つ情報が入手しにくくなる。また反対に、多くの異なる他者と関係を取り結ぶ「開放型」ネットワークを保持する労働者が望ましい転職結果を得る可能性が高くなると考えられるだろう。このような理由から、2000年以降、弱い紐帯を用いて、自分の交際範囲とは異なる集団の人々に接近することが望ましい職を得るために必要な手段となったのではないかと考えられる。

本書によって生み出されたジョブ・マッチング過程の研究の一例として筆者の研究を紹介したが、他にも英国、オランダ、ロシア、オーストラリア、中国などの数多くの労働市場のマッチング過程の研究が存在する。このように、本書で論じられる独創的な理論に触発されて、これからも多くの研究が生み出されることだろう。

Mark S. Granovetter, *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*, 2nd ed., University of Chicago Press, 1995 (渡辺深訳『転職——ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房, 1998年)。

参考文献

- Fernandez, Roberto M., Emilio J. Castilla and Paul Moore (2000) "Social Capital at Work: Networks and Employment at a Phone Center," *American Journal of Sociology*, 105, pp.1288-1356.
- Fernandez, Roberto M. and Nancy Weinberg (1997) "Sifting and Sorting," *American Sociological Review*, 62, pp.883-902.
- Granovetter, Mark (1973) "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78, pp.1360-1380.
- (1974) *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- (1981) "Toward a Sociological Theory of Income Differences," In *Sociological Perspectives on Labor Markets*, edited by Ivan Berg, New York: Academic Press.
- (1982) "The Strength of Weak Ties: A Network Theory Revisited," In *Social Structure and Network Analysis*, edited by Peter V. Marsden and Nan Lin, Newbury Park, CA: Sage Publications.
- (1985) "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness," *American Journal of Sociology*, 91, pp.481-510.
- (1990) "The Old and the New Economic Sociology: A History and Agenda," In *Beyond the Marketplace: Rethinking Economy and Society*, edited by Roger Friedland and A.F. Robertson, New York: Aldine de Gruyter.
- (1995) *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*, 2nd ed. University of Chicago Press.
- Granovetter, Mark and Charles Tilly (1988) "Inequality and Labor Processes," In *Handbook of Sociology*, edited by Neil Smelser, Newbury Park, CA: Sage.
- Lin, Nan (2001) *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (ナン・リン『ソーシャル・キャピタル』(筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳) ミネルヴァ書房, 2008年.)
- Watanabe, Shin (1987) "Job-Searching: A Comparative Study of Male Employment Relations in the United States and Japan," Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Sociology, University of California, Los Angeles, UMI Dissertation Information Service Order No.8727817.
- ポランニー, カール (1975) 「制度化された過程としての経済」『経済の文明史——ポランニー経済学のエッセンス』玉野井芳郎・平野健一郎編訳, 日本経済新聞社.
- 渡辺深 (2014) 『転職の社会学——人と仕事のソーシャル・ネットワーク』ミネルヴァ書房.

(わたなべ・しん 上智大学総合人間科学部教授)